

「あいづち論」について

著者：水谷信子（1988）

報告者：西郡 仁朗

出典：『日本語学』12巻7号, 4-11

【要旨】（報告者による）

日本語の会話における一つの大きな特徴として「あいづち」が議論されている。日本語での「あいづち」は量的には非常に多く、質的には相手の発話を促し励ますもので外国語とは異なるため、日本語教育では特に指導が必要な項目である。また、あいづちは発話の文の単位や文末表現と密接に関わる。会話におけるあいづち、「繰り返し」「言い変え」等、相手の発話の確認・補強・文の完成は日本語の「共話」的性質を示唆している。

【内容】

1. あいづちの定義

この稿での定義：「話の進行を助けるために、話の途中に聞き手が入れるもの」

応答的な「ええ」「うん」は含めない。

あいづちの機能：相手の話を、あるまとまりまで聞いて「はい、そこまで分かりました。次をどうぞ。」と促す合図。日本人はないと不安になる。

日本語でのあいづち：質的にも量的にも日本語の一つの特徴（日本語教育での経験）

2. あいづちに対する誤解

外国人が日本語のあいづちについて抱く誤解

2-1. 実質的応答と誤解する：あいづち使われることば…「はい」「ええ」「うん」「はあ」など

Yes, 賛同と同じことば→後で賛同していなことを知り失望・不信感

2-2. ことばのさしはさみを無礼だととらえる

「あいづち」の英訳…英語母語話者への質問の答えの一つ= “Interruption！”

個人差・文化差はあるが、相手が話し終わるのを待ってから口を開くのが礼儀と考えている外国人が多い。

- ・日本語のあいづち：質的には文の途中で励ます意味で打ち、量的には頻度の高さという意味で特徴的（英語圏、欧州言語圏、中国、台湾、韓国にはない）
- ・日本語教育上の問題：日本人と日本語でコミュニケーションを持つ場合、訓練が必要。
- ・あいづちの訓練例：

対象…中上級日本語集中教育（学習者は英語圏の者）

目的 1…日本人の頻繁なあいづちの意識化

テレビ番組（インタビュー・座談）を素材とした。

目的 2…あいづちの訓練（会話文であいづちを打つべきところに斜線を記し練習）

結果（目的 2 について）…個人差あり。動機の強さ、心理的抵抗との関連がある。

3. あいづちの実際（水谷信子「あいづちと応答」『話しことばと表現』（筑摩書房）

3-1. あいづちの頻度

平均：1 分間に 15～20 回（個人差、相手との関係、場面により違うが最小 11 回、最高 26 回）

相手の発話速度が速ければあいづちの頻度も上がる

あいづち間隔…相手の発話音節 14～26、平均 20 音節

20 音節の発話例：先日は大変ごちそうになりました… (19)

きのう山本さんに会ってあの話をしたら… (22)

あいづちは話しことばの「コンマ」（一息で話せ、聞き手の頭にすんなり入る）

→日本語会話教材で暗唱する会話文の長さについて示唆的

3-2. あいづちで使われることば

言語的には 40 種以上…「はい」「ええ」「うん」、(感嘆を示す)「ふうん」「へえ」「ほう」、「そう」「それで」「なるほど」(笑いを伴う)「ふふ」「えへ」

うなづきを含めればもっと多くなる。

3-3. 話しことばの文の形への影響

あいづちが入る前の文の形：「～て」「～けど」「～だから」が多く完結した文の形ではない。

例 1. きのう広島で学会があつて…

2. ちょっと無理して出かけて行ったんですけど…

3. 彼、どうもあまり調子が良くないようだから…

会話での文とあいづち：

「～て」（ええ）「～けど」（ええ）「～だから」（ええ）・・・と思いました。

全体で 1 文とすると膨大。あいづちを切れ目とした部分まで（+終助詞）をまとまりと考える必要がある。発話の文の単位とあいづちとの密接な関係。

日本語教育での注意点

・あいづちを認識した指導

ないと：日本人の現実の話し方についてマイナスの印象

文を完結させた発話のみでは会話のつなぎ目がなく話が弾まず、依頼の際などには威圧的。

例：先生、お忙しいところをまことに恐れ入りますが、私が書いたこの作文をちょっと見て直していただけないでしょうか。（一息）

4. あいづちと「共話」

4-1. 広義のあいづち

<繰り返し>

- それでやっぱり、人間の考え方には、住んでいる環境が影響していて…
- ウン
- 雨が多いとか、地震がよくあるとか、そうした自然環境…
- 自然環境…
- うん、そういうものの影響が強いんじゃないかな

<言い換え>

- 雨が多いとか、地震がよくあるとか、そうした自然環境…
- というか風土…
- うん、そういうものの影響が強いんじゃないかな

4-2. 共話

- 雨が多いとか、地震がよくあるとか、そうした自然環境が…
- 強いということだね。
- うん

- 夕べの地震…
- 大きかったねえ
-

あいづちとの共通点：聞き手が話し手に協力し、話に参加しようという態度（助け船）

→外国人は一般にマイナスの価値判断をもってとらえる（無礼）

日本語では相手の言ったことの確認・補強・文の完成は積極的な聞き方として歓迎

外国語の「対話」

日本語の「共話」

あいづちと声の重なりが多い。

相手に後半の完成を委ねる→文の後半の省略

・ただし、日本語でも事務的な話・討論では対話的

・外国語でも共話があるのではないか

あいづちの問題の基本的観点：会話の目的性と価値観

その場における話し手と聞き手の選択

【誤字・脱字など】

特になし

【この論文の評価と問題点】

- ・ 日本語コミュニケーションでの聞き手の行動に着目した早期の論文で、著者が著名人であるため強い影響を与え、後の研究の広がりにつながる意味があった。
- ・ あいづちが日本語独特であるかのような記述は筆が滑ったとしか思えない。『日本語学』の同じ号に「中国語のあいづち」という論文が掲載されているし、この論文以前の70年代すでにシェグロフなどがエスノメソドロジーで会話分析を開始している。
- ・ あいづちの頻度を計測する際に音節を数えているのも大きな疑問。日本語はモーラ言語であるはず。